9 月 18 日のメッセージ

聖書：ガラテヤの信徒への手紙　1：　1－10

「御自身を献げてくださった」

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」(マルコによる福音書 12:30)と命じられているにもかかわらず、ガラテヤの人々は神から離れようとしています。それは、何か別の福音ではなく、キリストの福音をないがしろにしようとしているだけだとパウロは憤ります(「キリストの恵みへ招いてくださった方から、あなたがたがこんなにも早く離れて、ほかの福音に乗り換えようとしていることに、わたしはあきれ果てています。……ある人々があなたがたを惑わし、キリストの福音を覆そうとしているにすぎないのです。」ガラテヤの信徒への手紙 1:6-7)。そのようなあなたたちのために、イエスは命を献げてくださったのではないか(「キリストは、……この悪の世からわたしたちを救い出そうとして、御自身をわたしたちの罪のために献げてくださったのです。」ガラテヤの信徒への手紙 1:4)と。

せっかく神から豊かな恵みが注がれ、神の前に正しく生きることができるようになったはずなのに、なぜか人間はすぐにその福音を、恵みを手放そうとしてしまいます。やはりそれは隣の芝生は青いからでしょう。サマリアの王アハブは、王として十分に恵まれているにもかかわらず、宮殿の隣にあるナボトのぶどう畑がほしくなり、話を持ちかけます(「アハブはナボトに話を持ちかけた。『お前のぶどう畑を譲ってくれ。わたしの宮殿のすぐ隣にあるので、それをわたしの菜園にしたい。その代わり、お前にはもっと良いぶどう畑を与えよう。……』」列王記上 21:2)。しかし、ナボトは「これは神から託された大切な恵みなのだから、それを手放すことなどできない」と突っぱねます(「ナボトはアハブに、『先祖から伝わる嗣業の土地を譲ることなど、主にかけてわたしにはできません』と言った。」列王記上 21:3)。

これが、恵みを与えられた人の正しい姿勢です。たとえ権力者が相手であろうとも、自分の恵みをしっかりと保ち、生かそうとします。この気概が欠けているとパウロは残念がっています。

もちろん、人間だから迷うことはあるでしょう。それでも、人はその迷いを神と向き合うことによって、祈ることによって乗り越えてきました。イエスも与えられた恵みを、託された役割を果たす際、迷いを祈りによって克服されています(「……できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、こう言われた。『アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。』」マルコによる福音書 14:35-36)。置かれた状況に囚われることなく、神への愛を貫かれたのです。

だから、今、パウロは、あなたがたも続いてほしいと願っています。もっとしっかり神への愛を示してほしいと迫っています。その方法は多々あるでしょうが、全身全霊で献げていくことが大切です。

やもめは持っているもの全てを献げました(「イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。「はっきり言っておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。」マルコによる福音書 12:43)。しかし、彼女はただ金を献げたのではありません。人生そのものを献げました。神から託されたものを精一杯生かす証しとして献げました。

パウロはガラテヤの人々に、「今一度、この姿勢を取り戻してほしい」と期待しています。「わたしの心があなたの掟に照らして／無垢でありますように。」(詩編 119:80)と祈る詩人のような姿勢を。「御自身をわたしたちの罪のために献げてくださった」イエスのような姿勢を。

私たちも全身全霊で神を愛し、惑うことなく自分自身を献げ続けたいと願います。「私に託され、献げることができるものは一体何なのか」と考えながら。